

**「苦難を通し、壁を越えて、次の世代へ」報告：
2014年2月15日、17日（第三回東日本大震災国際神
学シンポジウム）**

| | |
|-----|---|
| 著者 | 山本 俊明 |
| 雑誌名 | 聖学院大学総合研究所Newsletter |
| 巻 | Vol.23 |
| 号 | No.3 |
| ページ | 52-53 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1477/00002726/ |

| | |
|------------------|---|
| Title | 「苦難を通し、壁を越えて、次の世代へ」報告：2014 年2月15 日、17 日 (第三回東日本大震災国際神学シンポジウム) |
| Author(s) | 山本, 俊明 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 52-53 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4966 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

第三回東日本大震災国際神学シンポジウム 「苦難を通し、壁を越えて、次の世代へ」報告 2014年2月15日、17日

前号で予告した第3回東日本大震災国際神学シンポジウムが開催された。当初予定していなかったが、関西地区でも阪神淡路大震災の被災地、神戸で開催したいとの要望があり、2月13日（木）に、「東日本大震災国際神学シンポジウム神戸」が青谷福音ルーテル教会を会場に開催された。フラワー神学大学院のホァン・マルティネス教授が「イエスの示したように苦しみ、また仕える——震災後の意味形成について」という主題で講演され、大阪キリスト教短期大学の津村春英教授とキリスト兄弟団西宮教会の小平牧生牧師が講演に対する応答し、ディスカッションされた。48名の参加であった。〈第一日〉 2月15日に御茶ノ水クリスチャンセンターを会場に東京のプログラムが開催された。40年ぶりの豪雪で交通機関が麻痺したため、開催も危ぶまれたが、数時間もかけて駆けつけた参加者により、開催することができた。

マルティネス教授の上記講演のあと、聖学院大学、藤原淳賀教授の司会でパネル・ディスカッションがもたれた。日本キリスト教社会事業同盟の稲

松義人理事長、カトリック新潟教区、菊地功司祭（カリタスアジア総裁）、東京基督教大学、倉沢正則学長が、「震災への関わりと震災の語り」を主題にそれぞれの立場から報告し、震災という苦難の意味、被災された方々への心のケアをどのようにすすめるか、また放射能問題という目に見えない課題にどのような解決があるのかを求めながら、福音を語っていくという共通の主題が浮かび上がった。なお発表予定であった西南学院大学神学部、濱野道雄准教授は、交通機関が止まったため、パネル・ディスカッションに間に合わず、最後の全体会の中で、報告された。

午後の分科会は、昨年、ひとつの分科会が時間が短かったという反省のもと、6つの主題に絞って、発表と議論がされた。「心理カウンセリング的配慮」（堀肇・鶴瀬恵教会）、「支援と宣教（宣証）」（大友浩一・宮城宣教ネットワーク、鈴木真・イザヤ58ネット）、「死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか」（吉田隆・東北ヘルプ）、「原発と震災」（川上直哉・東北ヘルプ、木田恵嗣・福島県キリスト教連絡会）、「在留外国人と震災」（佐藤信行・在日韓国人問題研究所）、「次期災害への備え」（栗原一芳・DRCnet首都圏災害プロジェクト、岩上敬人・DRCnet災害対応チャブレン委員会）の6主題であった。

全体会は、ホイートン大学人道的災害支援研究所のデービッド・ボーアン共同所長が「災害が教会に教えること」という主題で、講演された。メディアはもっとも報道価値のある過酷で例外的な事態を取り上げるが、焦点が当てられるのが短時間であるが、長期間にわたって苦しむのがだれであるかを見過している。教会は長期的な視点をもって「癒し」を与えるプログラムなど、実践をとおして地域に働きかける存在であるべきと語られた。

閉会礼拝は、聖学院大学の阿久戸光晴学長代行



シンポジウム風景

が「切り倒された木から生まれる種子——2度目に見えてくる世界」という主題で説教を担当された。参加者は午後に増え、79名であった。

〈第二日〉 17日は、青年を中心としたプログラムであった。ホイートン大学のジョージ・カランティス准教授が「あなたは誰の足を洗うのか——苦難のただ中でリーダーを起こす」という講演をされ、参加者が小グループに分かれディスカッションをした。

午後は、青年たちの発表と小グループでのディスカッションで構成された。「土の器/キリストという宝」(近藤愛哉・盛岡聖書バプテスト教会)、「スローワーク——丁寧な出会いと祈り」(佐藤真史・日本キリスト教団東北地区・被災者支援センター)、「弱く小さくされているいのちに寄り添う」(片岡自由・会津放射能情報センター)、「キリスト者学生として、地域社会で福音に生きる」(桑島みくに・キリスト者学生会)であった。最後の礼拝はテゼのスタイルで静かに被災地に思いを寄せるひとときであった。参加者は120名であった。

この東日本大震災国際神学シンポジウムで形成されてきた教団教派を越えた交流の場を今後も継続していくことが確認され、2日にわたるシンポジウムを終えたのである。

(文責：山本俊明[やまもと・としあき] 東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員)